

1. 職名・氏名 准教授・加藤裕美2. 学位 学位 博士、専門分野 文化人類学、授与機関 京都大学、授与年月 2011年11月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 東南アジアの文化と社会 （2単位） 1・2・3年次担当
②内容・ねらい（自由記述） 東南アジア各国の現代的状況を環境、国家、民族、宗教、食文化、芸能など様々な視点から読み解いていく。東南アジアは日本から遠い地域ではなく、私たちの生活のなかにも東南アジアとつながりのモノ、人があふれていることを理解することをねらいとした。
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 技能実習制度やツーリズム、宗教紛争、サブカルチャーなど、現代的テーマを盛り込んだ構成とした。教材は、記入式のレジュメとパワーポイントを併用し、要点が分かりやすくなるよう工夫した。フィールドワークで得られた情報や教員自身が撮影した写真、動画、体験談を多く盛り込むことによって、学生の関心を喚起するよう努めた。民族衣装や食文化を体験する機会を設け、現地社会の状況が分かりやすくなるよう工夫した。 毎回リアクションペーパーを配布し、授業内容について学生の考察を記入させた。これにより、文章力や論理的な記述力の向上をはかり、学生の理解状況を把握した。授業の冒頭で前回の復習と、リアクションペーパーへのフィードバック、そして質問への回答と解説を行った。 福井県内に住む JICA 青年海外協力隊 OB、インドネシア人技能実習生雇用者、ベトナム駐在経験者などをゲストスピーカーに呼び、多角的な視点から東南アジアの文化と社会への理解が深まるよう工夫した。毎回トピックに関連する書籍を回覧し、授業後も学生がさらなる学習を行う手助けとなるよう配慮した。
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 教養の最前線 C（人類学） （2単位） 2・3・4年次担当
②内容・ねらい（自由記述） この授業では、難民、移民、紛争、開発、環境問題など、現代社会における諸問題を人類学的視点から理解することを目的とした。前半は講義形式で、後半はゼミ形式で授業を進め、学生の調べ学習、発表とディスカッションを行った。
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 前半の講義では、人類学の基本についての講義を行った。人類学とは何か、人類学の研究方法、伝統医療と現代医療、開発と環境問題などの講義を行い、人類学の分析手法について理解を目指した。また、受講生は海洋生物資源学部の学生であるため、海で暮らす人々の人類学についても扱った。講義では、記入式のレジュメとパワーポイントを併用し、要点が分かりやすくなるよう工夫した。教員がフィールドワークで得られた情報や写真、動画、体験談を多く盛り込むことによって学生の関心を喚起するよう努めた。 若狭町にある、福井県立若狭歴史民俗博物館を訪れて、若狭・小浜の民俗や信仰、文化についてフィールドワークを行った。 授業の後半では、異文化理解、観光、ジェンダーなど学生各自の人類学的関心に基づくテーマを設定し、文献を読んで発表を行った。また、調べ学習の成果をパワーポイントにまとめて発表とディスカッションを行った。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

導入ゼミ（はじめての東南アジア）（1単位） 1年次配当

②内容・ねらい（自由記述）

このゼミでは、東南アジアについて自身の興味のあることを発見し、それを調べ、他者にわかりやすく伝える技術を習得することをねらいとした。そのなかで、大学生活に必要な基本的スキルである、文献検索、レジュメ作成、レポート執筆、パワーポイントを用いた発表、ディスカッションのしかたについて学ぶ。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

少人数制授業であるため、グルーディスカッションや学生同士の発話の時間を多く設けた。大福帳を利用し、各回の授業の感想や質問を1枚の紙に書き、教員がコメントを入れるようにした。それにより学生は毎回の授業で何を学び、何を感じたのかが一目で把握できるようにした。

文献検索、レジュメの作成、レポート執筆についてはポイントを絞ったレジュメを配布し、課題を提出させ、授業で発表することによって双方向に習得度合いを確認した。後半の調べ学習では、学生の関心を深める幅広いテーマを選択できるように工夫し、各自が作成したレジュメや発表に対して学生同士で相互評価を行った。相互評価は無記名で発表者にも提示した。自国や自分の地域にとらわれない国際的な視野の獲得のため、福井県内でフィールドワークを実施した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

教養ゼミ（東南アジア・スタディツアー）（1単位） 1年次配当

②内容・ねらい（自由記述）

東南アジアへのスタディツアーを企画する過程を通して、大学生活での基本的スキルである、文献検索、要約、レジュメ作成、レポート執筆、パワーポイントを用いた発表、ディスカッションのしかたについて学んでいく。自身の興味のあることを発見し、調べ、他者にわかりやすく伝える技術を習得することをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

少人数のゼミであるため、学生同士で発話する時間を多く設けた。学生のモチベーションを維持するため、スタディツアーのテーマは自発的に選ばせている。前半はスタディツアーのテーマについての調べ学習を行い、レジュメやパワーポイントを用いた発表に対して相互評価を行った。相互評価は無記名で発表者にも提示した。後半はスタディツアーの立案、計画、航空券の調べ方などを学び、各自の関心のあるテーマについて海外でフィールドワークを行う可能性について検討した。

福井市にあるインドネシアからの技能実習生を受け入れている農園でフィールドワークを実施した、またマレーシア料理店でもインタビューを実施した。東南アジアの文化を見、聞き、体験できるよう工夫した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

外国語特講B（インドネシア語）（1単位） 1・2・3年次配当

②内容・ねらい（自由記述）

初めてインドネシア語を学ぶ人を対象に、初級の読み、書き、会話ができるようになることを目標とした。特に、初級インドネシア語が読めるになること、初級インドネシア語の文法を理解し、書けるようになること、観光旅行で必要となる初級インドネシア語で会話ができるようになることをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

テキストをコピーして配布し、毎回テキストに沿って基本的な文法や語彙の習得、会話の練習を行った。発音能力向上のために学生2人1組がペアになり、会話の練習と発表をする時間を多くとった。また、毎回単語テストを行い、基本的な語彙の着実な習得を目指した。現地の動画や写真を見せることにより、現地社会に学生が興味を持つよう工夫した。スチューデントアシスタントのインドネシア人留学生によるインドネシア料理を体験する機会を設け、言語だけではなく文化理解にもつながる工夫をした。

①担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
比較文化論 (2 単位) 1・2・3 年次配当

②内容・ねらい (自由記述)

オムニバス講義の1回を担当した。「マレーシアの熱帯雨林ではぐくまれる文化」と題し、東南アジアの文化、そして熱帯雨林で暮らす狩猟採集民の文化について講義を行った。比較文化論的な視点を獲得すること、そして狩猟採集民の文化の特徴について理解することをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

授業の冒頭で文化とは何か、比較文化論とは何か、比較文化論的な視点を獲得することによって何が分かるのかについて講義を行った。記入式のレジュメとパワーポイントを併用し、要点が分かりやすくなるよう工夫した。フィールドワークで得られた情報や教員自身が撮影した写真、動画、体験談を多く盛り込むことによって現実的な関心を喚起するよう努めた。前後の授業の内容も踏まえ、各文化の類似点と相違点を指摘させる工夫をした。マレーシアの狩猟採集民の人々が利用している日用品や工芸品を回覧することにより、目で見て手で触って理解できるように心がけた。

①担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
教養特講Ⅰ (観光学) (2 単位) 1・2・3 年次配当

②内容・ねらい (自由記述)

マストツーリズム、ホストゲスト関係、異文化接触、伝統の変容、世界遺産、文化の商品化など、ダイナミックに絶えず変化する現代社会における観光のありさまを世界各地の事例とともに解説した。地域現象としての観光の諸課題について検討し、地域社会の関わり方や持続可能な観光のあり方について理解することをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

観光学の理論と事例の両方を学べるような構成にし、事例では、福井県内、日本、世界とバランスよく学べるように留意した。統計データや新聞記事を用い、客観的に観光現象を理解できるように試みた。

記入式のレジュメとパワーポイントを併用し、スライドには図表や写真を多く載せた。毎回、観光について1~3本の短編動画を視聴することにより、視覚的な理解を助けた。198人が受講した大講義であったが、講義が一方向的にならないよう、適宜学生を当て意見を求め、緊張感をもって授業に臨めるように努めた。観光行政に携わる人をゲストスピーカーに呼び、様々な視点から観光現象を学べるように取り組んだ。

毎回リアクションペーパーを配布し、授業内容について学生の意見を記入するようにした。これにより、文章力や論理的な記述力の向上をはかり、学生の理解状況を把握した。授業の冒頭では前回の復習と、リアクションペーパーへのフィードバック、そして質問への回答と解説を行った。授業に関連する書籍を回覧し、授業後も学生がさらなる学習を行う手助けとなるよう工夫した。

①担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
宗教学 (2 単位) 1・2・3 年次配当

②内容・ねらい (自由記述)

世界の宗教現象を通して人間の考え方の多様性を学び、宗教や信仰が人間の生き方に与える影響について解説する。世界の多様な宗教の基本事項について理解できること、また異なる宗教を信仰する人々の生き方を理解し、尊重できるようになること、宗教という視点から現代社会や自分自身を客観的に考察できるようになることをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

統計データを用いることにより、現代日本人の宗教、あるいは世界の宗教について客観的に理解できるよう工夫した。仏教、神道、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥ教など、主な宗教の基本事項を解説するとともに、宗教紛争や宗教のグローバル化など、現代社会に関係するトピックを選び、学生の関心に沿うように構成した。大本山永平寺の僧侶、福井県内のモスクや

教会で活動を行う人々をゲストスピーカーに呼び、また留学生に出身国の宗教について発表してもらうことにより、信仰について現実的関心を喚起できるよう気を付けた。

穴埋め式のレジュメとパワーポイントを併用し、パワーポイントには写真や図表を多く載せた。毎回短編動画を1~3本視聴することにより、視覚的な理解を助けた。155名が受講した大人数講義であったが、一方的な講義にならないよう、聖書やコーラン、護符の回覧、ムスリムの男性女性の服装体験などを行い、五感を使って理解できるように工夫した。

毎回リアクションペーパーを配布し、学生の意見を書かせることによって、文章力と論理的な記述力の向上を図った。講義が一方的にならないよう、回収したリアクションペーパーは次の回でフィードバックを行った。各回の授業に関係する参考図書を回覧することにより、授業後の復習の手立てとなるように工夫した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
東南アジアの言語と文化（2単位） 1・2・3年次配当

②内容・ねらい（自由記述）
東南アジア地域における異なった3つの言語（タイ語、ベトナム語、マレー語）をオムニバス形式で学ぶ授業であり、マレー語5回を担当した。あいさつや簡単な文法、数字の教え方など取得することを狙いとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
テキストをコピーして、テキストに沿って基本的な文法や語彙の習得、会話の練習を行った。発音能力向上のために学生2人1組がペアになり、会話の練習をする時間を多くとった。また、毎回単語テストを行い、基本的な語彙の習得を目指した。ドラえもん、ドラゴンボールなど学生になじみのあるアニメを取り入れることにより学生が興味を持つよう工夫した。昼休みにインドネシア料理を体験する機会を設け、言語だけではなく文化の理解にもつながるように工夫した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
研究の世界（2単位） 1・2・3年次配当

②内容・ねらい（自由記述）
オムニバス講義の1回を担当した。「人と動物の間にー人類学の視点から」と題し、文化人類学の基本的な考え方や研究方法、フィールドワークの魅力について理解することをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
文化人類学の基本的な研究方法、フィールドワークの仕方、エミックの視点とエティックの視点について初めに講義した。フィールドワークでの事例から問いを出し、それが何を意味するのか解かせることによって、文化人類学的視点を理解できるように心がけた。記述式のレジュメとパワーポイントを併用し、レジュメには重要事項を書き込めるようにし、要点が分かりやすくなるよう工夫した。調査中に撮影した写真や動画を映し、研究の状況が分かるように工夫した。

(2)非常勤講師担当科目

①担当科目名（単位数） 開講学校名

②内容・ねらい（自由記述）

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

④本学における業務との関連性（自由記述）

(3)その他の教育活動

内容

2018年度後期「地理学」において2回ゲストスピーカーとして講義を行った。

11月1日「東南アジアの土地利用図を読み解く」

12月20日「海で暮らす人々の地誌学」

ファカルティ・ディベロップメントの一環として他教員による以下の授業を聴講し、教授法の改善に努めた。

2018年度は文化人類学（杉村和彦先生）、西洋史（松本涼先生）の授業を聴講した。

2019年度は、中国語Ⅰ（亀田勝見先生）、神話学（松本涼先生）、美学（北村友之先生）、社会学（加藤まどか先生）、環境論（大石善隆先生）、地理学（石丸香苗先生）現代の科学（中村匡先生）の授業を聴講した。

4. 研究業績（2017年～2019年）

(1)研究業績の公表

①論文

（タイトル、共著者の有無（共著の場合は主たる担当箇所について）、掲載雑誌名（号数）、掲載（受理）年月日）

Kato, Y., Samejima, H., Ichikawa, M. 2017. Trans-river migration of the Iban and the Bekatan to the Tatau River Basin in Bintulu, Ngingit 10: 3-11. 2017年12月.

加藤裕美 2017「サラワクのロングハウス社会におけるインドネシア人移住者との共住」マレーシア研究 6: 71-85. 2017年10月

Kato, Y. 2017. Perceptions of Iban in the Sihan ethnoscape, Ngingit 9: 49-58. 2017年7月.

②著書

（タイトル、共著者の有無（共著の場合は主たる担当箇所または担当ページ）、出版年、出版社名）

加藤裕美 2019 「狩猟」信田敏宏編『東南アジア文化事典』丸善出版：東京 p. 130-131.

加藤裕美 2019 「サラワク州の民族」信田敏宏編『東南アジア文化事典』丸善出版：東京 p. 262-263.

Kato, Y., Langub, J., Abdullah, R. A., Samejima, H., Soda, R., Uchibori, M., Okuno, K., Ishikawa, N. 2019. "Multiethnic society of central Sarawak: An ethnographic analysis. N. Ishikawa and R. Soda (eds.) *Anthropogenic tropical forests: human-nature interfaces on the plantation frontier*; Springer, pp. 85-109.

Kato, Y., Samejima, H. 2019. The effects of landscape and livelihood transitions on hunting in Sarawak. N. Ishikawa and R. Soda (eds.) *Anthropogenic tropical forests: human-nature interfaces on the plantation frontier*; Springer, pp. 277-313.

Kato, Y., Soda, R. 2019. The Impact of RSPO Certification on Oil Palm Smallholdings in Sarawak N. Ishikawa and R. Soda (eds.) *Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier*, Springer, pp. 337-356.

Soda, R., Ishikawa, N., Kato, Y. 2019. From river to road? Changing living patterns and land use of inland indigenous peoples in Sarawak. N. Ishikawa and R. Soda (eds.) *Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier*, Springer, pp. 315-335.

Soda, R., Kato, Y. 2019. The Autonomy and Sustainability of Small-Scale Oil Palm Farming in Sarawak. N. Ishikawa and R. Soda (eds.) *Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier*; Springer, pp. 357-374.

加藤裕美 2018「食べられる肉/食べられない肉：ボルネオ・シハンにおける食肉概念の曖昧さと多義性」野林厚志編『肉食行為の研究』平凡社. Pp. 62-89. 2018年3月.

加藤裕美 2017「ブルネイ」『サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで』平凡社 pp. 252-253. 2017年8月.

加藤裕美 2017. 「森のキャンプ・定住村・町をまたぐ狩猟採集民ーボルネオ、シハンの現代的遊動性」池谷和信編『狩猟採集民から見た地球環境史ー自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会. Pp.270-283. 2017年3月.

③学会報告等

(タイトル、報告学会(大会)名(開催年月日)、共同報告者の有無(共同報告の場合は主たる担当箇所))

Kato, Y. 2019年8月31日 Interaction of Sihan with other ethnic groups in Belaga town, Malaysia. International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2019 Inter-Congress. 2019年8月27日~31日 Poznan University, Poznan, Poland.

加藤裕美 2019年8月3日「ボルネオ島の森林開発と少数民族の生活変容」2019年度第2回 学術教養センター研究会. 福井県立大学.

Kato, Y. 2018年8月8日 Trend and factors of wildlife trade in Malaysia and Indonesia. 16th Congress of International Society of Ethnobiology. Hanger Convention Center, Belem, Brazil.

酒井章子、Choy Yee Keong、岸本圭子、高野(竹中)宏平、市川昌広、西前出、鮫島弘光、加藤裕美、祖田亮次、潮雅之、中静透、市岡孝朗 2018年6月9日 土地被覆図と質問票調査からみたマレーシア・サラワク州の村落の森林の40年. 第28回日本熱帯生態学会(静岡大学)

加藤裕美 2018年10月26日「マレーシアの狩猟採集民シハンの社会性」日本文化人類学会北陸人類学研究会第148回例会. Fスクエア(福井駅前).

Kato, Y. 2017年4月18日 Women's Lifestyle Change and Transmission of Knowledge: Rattan Handcraft in Borneo. Annual Research Meeting of Hakubi Center. Shiran-kaikan, Kyoto.

Sakai, S., Choy, Y. K., Kishimoto-Yamada, K., Takano, T., K., Ichikawa, M., Samejima, H., Kato, Y., Soda, R., Ushio, M., Saizen, I., Nakashizuka, T., Itioka, T. 2017年3月14日. Urbanization, population change and forest cover in rural Borneo. The 64th Annual Meeting of the Ecological Society of Japan. Waseda University, Tokyo, Japan.

④その他の公表実績

報告書等

加藤裕美 2019 「福井在住インドネシア人のネットワーク」『日本文化人類学会北陸人類学研究会ニューズレター28』Pp.19-23. 2019年3月.. (単著)

(2)学会活動等

学会でのコメンテーター、司会活動(担当報告名、担当学会(大会)名(開催年月日))

2018年9月20日「マイクロヒストリーから照射する越境・葛藤と共生の動態に関する比較研究」第7回研究会において王柳蘭発表「離散中国ムスリム・パンロン人の越境と自己像の模索」に対するコメント、および瀬戸徐絵里奈発表「日本の越橋(Việt Kiều)二世の「帰還」経験: 2010年代を日本とベトナムで生きる若者たちの選択」に対するコメント。同志社大学今出川キャンパス良心館。

学会での役職など(学会名)

学会・分科会の開催運営(担当学会(大会)名(開催年月日)、開催場所)

(3)研究会活動等

①その他の研究活動参加(参加研究会名、調査活動名(期間))

a. 京都大学地域統合情報センター共同研究「マイクロヒストリーから照射する越境・葛藤と共生の動態に関する比較研究」(共同研究メンバー)2017年度-現在 代表者: 王柳蘭

b. 福井県立大学戦略的課題研究推進支援「観光の文化資本と異文化交流」(研究分担者)2018年度-現在 代表: 山崎茂雄

②その活動による成果
a. 共著の本を出版予定である。
b. 共著の本を出版予定である。
(4)外部資金・競争的資金獲得実績
科学研究費補助金若手研究「マレーシアにおける定住した狩猟採集民が現代的な社会問題を克服するための実証的研究」(研究代表者) 2019年度-2022年度 科学研究費補助金基盤研究(B)「ボルネオの原生林保護と先住民コミュニティの自律的生存が両立する持続的管理の条件」(研究分担者) 2019年度-2023年度 代表者: 金沢謙太郎 京都大学地域統合情報センター共同研究「ミクロヒストリーから照射する越境・葛藤と共生の動態に関する比較研究」(共同研究メンバー) 2017年度-現在 代表者: 王柳蘭 科学研究費補助金若手研究(B)「グローバル化における『狩猟採集民』と『農耕民』関係の再考」(研究代表者) 2015年度-2018年度. 377万円.
(5)特許出願
なし

5. 地域・社会貢献

(1)学外団体
①国・地方公共団体等の委員会・審議会 (それぞれの名称、業務内容、担当期間)
②国・地方公共団体等の調査受託等 (それぞれの名称、業務内容、活動期間)
③(公益性の強い) NPO・NGO 法人への参加 (それぞれの名称と活動内容、活動期間)
④(兼業規程で業務と見なされる範囲内での) 企業等での活動 (企業名、活動内容、活動期間)
⑤大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等 (事業名称及び主催・共催者名、活動内容、活動期間)
⑥その他 (名称、活動場所、活動期間)
(2)大学が主体となっている地域貢献活動等
①公開講座・オープンカレッジの開講 (タイトル名、開催場所、開催日時) 加藤裕美 2019年11月5日「マレーシアの熱帯雨林と少数民族の文化」福井県立大学公開講座ケンダイワールドツアー第1回。福井県立大学多目的ホール。 加藤裕美 2018年7月27日「観光事業をどのように進めるべきか」福井県立大学公開講座『観光学の基本』第7回。ホテルエコノ福井。(パネルディスカッション) 加藤裕美 2018年7月13日「様々な形のエコツーリズム」福井県立大学公開講座『観光学の基本』第5回。ホテルエコノ福井。 加藤裕美 2018年6月22日「カルチャーツーリズムの魅力」福井県立大学公開講座『観光学の基本』第4回。ホテルエコノ福井。
②社会人・高校生向けの講座 (タイトル名、開催場所、開催日時)
③その他 (名称、活動場所、活動期間) 新聞・ラジオ等の取材 2018年12月23日「世界駆けユニーク研究」福井新聞(取材協力) 2018年6月30日 FBC 福井放送ラジオ「ようこそ県立大学へ」出演
(3)その他(個人の資格で参加している社会活動等)

(活動内容、主たる活動場所、活動期間)

6. 大学の管理・運営

(1) 役職 (副学長、部局長、学科長)

(職名、期間)

(2) 委員会・チーム活動

(名称、期間)

学長主導観光プロジェクト

全学委員会

COE委員会 (2019年4月～現在)

地域志向科目部会 (2019年4月～現在)

学術教養センター内委員会

国際交流委員会 (2018年4月～現在)

研究・広報委員会 (2018年4月～現在)

親睦委員会 (2018年4月～2019年3月)

(3) 学内行事への参加

(行事名、参加日時)

World Café Culture Explore Event に参加

2018年6月18日～6月29日 Malaysia に関するポスター作成・展示

2018年6月25日「Introduction of Malaysia」口頭発表 (英語)

LEAP/LCAP 海外語学研修体験報告会審査員 (2018年度・2019年度)

(4) その他、自発的活動など

(活動名、活動内容、活動期間)

World Café との交流や意思疎通を円滑にするために、2018年度前期毎週木曜日のランチ会に参加した。